

キース・バージェス-ジャクソン 「アンスコム, G.E.M.(1919-2001)」

吉田廉・江口聡訳

2024-02-26

Keith Burgess-Jackson, “Anscombe”, Alan Soble (ed.) *Sex from Plato to Paglia*, Greenwood, 2006. <https://amzn.to/2QZoQ26> の非合法訳です。

Anscombe, G. E. M. (1919-2001). ガートルード・エリザベス・マーガレット・アンスコムはアイルランドのリムリック生まれであり、二十世紀の英国系米国人哲学者を先導した一人である。1937年、彼女がまだ十代の頃、二つの重大な出来事が起きた。それは、オックスフォード大学のセント・ヒューズ・カレッジに入学したこと、そしてローマ・カトリックに改宗したことである。セント・ヒューズに入学して一年後、彼女はピーター・トマス・ギーチと出会った。三才年上の哲学科の学生であり、彼もまた、ローマ・カトリックに改宗していた。二人は1941年に結婚し、同年アンスコムは卒業した（〔優等学位〕First Class Honoursで）。翌年、アンスコムはケンブリッジ大学のニューナム・カレッジで大学院生として研究を始めた。そこで彼女はルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン (1899-1951) の講義に出席した。彼女は1946年にオックスフォードのサマーヴィル・カレッジで博士研究員（後に研究員）に任命された。その翌年は、彼女はケンブリッジにウィトゲンシュタインを毎週訪ねた。ウィトゲンシュタインは1951年に没し、ゲオルク・ヘンリク・フォン・ウリクト (1916-2003) とラッシュ・リース (1905-1989) と彼女の三人を遺稿管理人に指名していた。三人の若き哲学者はウィトゲンシュタインの膨大な哲学的著作の編集・翻訳・出版を任された。

アンスコムによるウィトゲンシュタインの『哲学探求』の英訳（原著はドイツ語）は1953年に出版された。これは二十世紀の哲学にとって歴史的な出来事だった。彼女はウィトゲンシュタインの著作のいくつかを翻訳し編集した。それには彼女一人の手によるものも、そうでないものもある。彼女の専門書『ウィトゲンシュタイン『論考』入門』は1959年に出版された。その二年前、彼女は『インテンション』を出版した。彼女と同時代に生きたドナルド・デイヴィッドソン (1917-2003) はこの書物を「アリストテレス以降最も重要な行為についての議論」(Dolan) と評している。彼女の学生であるトマス・ネーゲルとロジャー・スクルトン (Dolan, 私的な会話) はセックスの哲学で名を馳せた。イギリス学士院の研究員に選ばれた三年後である1970年にアンスコムはケンブリッジのウィトゲンシュタインがいた哲学のポストに選ばれた。彼女は引退する1986年までそこで教鞭をとった。彼女の『哲学的論文集成』は1981年に三巻本で出版された。彼女が最後に書いた論文（「実践的真理」）が発表されたのは1999年のことであり、彼女は80歳であった。

アンスコムは59年を共にした夫と七人の子を残し、二年後ケンブリッジで没した。

アンスコムの哲学的著作は精妙で、独創的で、〔その扱う内容も〕多岐に亘る。彼女は生涯を通じて、倫理学、それも理論的なものと実践的なものの両方に興味を持っていた。大学院のゼミではすでに読まれ議論がなされていた1958年の論文「現代道徳哲学」は徳の研究を〔現代に〕復活させた。（ギーチもこの話題についての本『美德』を1977年に出版している。）行為の正しさは、行為にとっては外的な特性であるその帰結によって決まるとする規範的倫理学の特徴を言い表すため「帰結主義」という表現を作り出した（「現代道徳哲学」, 12）。彼女が賛同していたローマ・カトリックの自然法の伝統と歩調を合わせる道徳性への彼女自身のアプローチは義務論的である。彼女が主張するには、特定の種類の行為は本質的に不正である。例えば、どんなに結果がよさそうであっても、無実の人を直接（意図的に）殺すことは常に不正である。アンスコムがアメリカの大統領ハリー・S・トルーマンは広島と長崎に原爆を落とすよう命令したという理由で、（文字通り）殺人者だと考えていた（「トルーマン氏の学位」）。彼女はまた生涯を通じて中絶に反対しており、彼女は中絶を殺人だと考えていた。彼女は信念を実践に移すために、1990年代初頭、娘たちと一緒に妊娠中絶施設の入り口を塞いだ。アンスコムと娘たちは逮捕され投獄された。ジョン・フィニスが弁護士を務めた。

アンスコムの性道徳は1968年の「子どもを作らずセックスできる」と1972年の「避妊と貞潔」という二本の論文に最もよく現れている（後者は頻繁に再録されたが、前者はアンスコムは「もっと慎重に論ずるべきだった」と考えている。『哲学的論文集成』第三卷 viii）。彼女が指摘したのは、「貞潔」には広義の意味と狭義の意味の両方がある、ということだ。狭義には、性交渉の自制（すなわち処女性）を意味するが、広義には性的な美德——性に特有の美德を意味する（「避妊と貞潔」136）。これらの論文で、アンスコムは貞潔という語を広い意味で使っている。

アンスコムの論文のねらいは、いわゆる（しばしば「周期避妊法」とも呼ばれる）と様々な種類の避妊具、たとえば「ピル」（経口避妊薬）、コンドーム、子宮内避妊器具（IUD）などによる性交には論理的差異があり、それゆえ、おそらくは道徳的差異があり得ることを示すことだ。アンスコムが語りかけている読者は彼女のカトリック信者仲間だった。彼女はカトリック教徒ではない人達を説得しようとはしなかったし、できなかっただろう。というのも、彼女はカトリックに特有の前提に基づいて主張しているからである（『哲学的論文集成』第三卷, vii）。アンスコムの論文を理解する方法の一つは、彼女の論文を避妊に関する教会の長年の教えの正当さを立証しようとするものとして読むことだ。（パウロ6世[1897-1978]による回勅 *Humanae vitae* が発布された1968年より前に一つ目の論文は書かれており、二つ目の論文はそのあとに書かれていることを注記しておく。）彼女は教会の教えが一貫している(coherent)ことを示そうとしているのであって、真であることを示そうとしているのではない。彼女は教会の教えが真実であることを前提として(assume)いる（「避妊と貞潔」137, 146）。安全日のセックスと避妊具によるセックスは違うという区別は恣意的だというカトリック教徒からも非カトリック教徒からも同様に向けられた批判に応答している。彼女の見解では、それは恣意的なものではない。

アンスコムを理解するためには、本質的に生殖的な行為という概念を理解しなければならない。たとえ実際に子どもを作らなくても、ある種の性的行為は、身体的行為として考えられた場合、本

質的に生殖的でありえる。アンスコムはこのことを次のアナロジーによって説明している。「本質的に生殖的な種類の行為であるためには、行為それ自体が実際に生殖的である必要はない。それは、どんぐりがどんぐりであるためには、どんぐりが実際に櫟の木になる必要がないのと同じである。」（「子どもを作らずにセックスできる」85）こうして彼女はその意図において本質的に生殖的な性行為とその意図において本質的に生殖的でない性行為を区別する。二つの区別は交差し、四つの包括的かつ相互に排他的な性行為のカテゴリーをなす。

1. 身体的行為としても、意図的行為としても、本質的に生殖的。このカテゴリーには子どもを作る意図はあるが安全日の行為であるような性行為が含まれる。
2. 身体的行為としては本質的に生殖的だが、意図的行為としては本質的に非生殖的。このカテゴリーにはピルや性交後の膣洗浄が含まれる。
3. 意図的行為としては本質的に生殖的だが、身体的行為としては本質的に非生殖的。このカテゴリーには人工授精が含まれる。
4. 身体的行為としても、意図的行為としても、本質的に非生殖的。このカテゴリーにはコンドームや膣内避妊具が含まれる。

周期避妊法とピルは、どちらも子どもを作らない意図があるので、同じようなものにみえるかもしれない。だが、これは重要な意図ではない。行為に本質的な（具体化した）意図もあれば、行為に外的な意図もある。カップルがピルを使う場合、それが意図的行為だとすると、彼らの行為は、本質的に非生殖的である。だが、同じカップルが安全日に性交すると、彼らの行為は、それが意図的行為だとすると、本質的に生殖的である。後者の場合では、カップルは生殖の可能性を残しているのに対して、前者の場合——ピルが使用されている——はそうではない。後者の場合ではカップルは妊娠を回避(evade)しているが、前者の場合ではカップルは妊娠を防止(prevent)している。ジェニー・タイヒマンは次のように説明している。

誰かの財産を奪うという意図は詐欺の本質の一部であるが、ほら話を語ることは本質の一部ではない。もしそのほら話が、誰かから財産を奪うという意図によっておこなわれたとしても、ほら話の本質であるとはいえないのである。妊娠を回避する意図があることは避妊したセックスの本質の一部ではあるが、妊娠を回避する意図があることは安全日セックス——この記述のもとでの——の本質的な部分ではない。もし仮に妊娠を回避する意図があつて安全日を選んだとしてもそうなのである。（154; 強調は原文）

アンスコムは夫婦間のセックスだけが許されるということを（カトリックの教えの一部として）当たり前のことと考えている。これは当然、同性愛と不倫を排除する。彼女はまた（これもカトリックの教えの一部として）避妊したセックスは結婚していようと許されないと考えている。彼女は、安全日セックスは避妊ではなく、それゆえ避妊したセックスの禁止にはあたらないことを示そうとした。これは結婚したカップルは決して子どもを作らないという意図で安全日にセックスしてもよい、ということの意味するわけではない。この「子供を作りたくないという」（外的な）意図は、そのカップルが貞潔ではないということを示している。さらには、子どもを決して作らないという意図でなされたカップルの結婚は「無効」であるか「そもそもそれは結婚ではない」（「子ども

を作らずにセックスできる」90)。

アンスコムは議論から、彼女はセックスを悪だと考えていたと推論すべきではない。むしろ反対に「交尾は食事と同じように、それ自体よい種の行為である。なぜなら、食事と同じように、交尾は人間の生命 (human life) を保つものだからだ。」(「子どもを作らずにセックスできる」80) と彼女は述べている。夫婦間の性行為を肯定する規範的な前提があるといっていよう。この前提は、他の前提と同じく、他の事情によってくつがえされることがありえる。

ある食事やセックスが悪いものになるのは、なにかそれを悪いものにするものが存在するときだけである。普通、セックスは、結婚生活の部分としては道徳的によいものである——それは貞潔な行為であり、貞潔という美德を身につけた人における貞潔な行為である。(「子どもを作らずにセックスできる」89)

また、アンスコムは性的快楽を欲求することがそれ自体で悪いものだという見解も持っていない。彼女はトマス・アクィナス (1224/25-1274) がこの論点について抱いている考えを批判して「欠点があり混乱しておる」(「子どもを作らずにセックスできる」89) と言った。「神は我々に繊細な欲求をお与えになった。また、熟考なしにその欲求が刺激されることは我々の生のはたらきの一部である」。だが「純粋に快楽のための」性交というものが現にあり、それはそのようなものとしてキリスト教により批判される。

「純粋に快楽のためのもの」であることのしるしは、このようなものだろう。つまり、性的快楽に対して節度がなかったり、それだけに没入してしまうこと、分別に反する欲望に屈すること、パートナーが本当に嫌がっているのに求めること (男性と女性の心理学上の事実からこの留保は必要である) など。最後の場合以外はどれも同意してもらえらるだろう、という。(90)

アンスコムにとって、快楽を求める動機は結婚生活に組み込まなければならない。

アンスコムによれば、それゆえ、安全日セックスと避妊したセックス、つまりピルやコンドームや IUD などを使用したセックスとの間には論理的差異がある。だが、すべての論理的差異が道徳的に重要なのではない。たとえば、右利きと左利きには論理的差異があるが、この差異が扱いの違いの根拠になると考える人はいない。なぜアンスコムは彼女が特定した論理的差異が道徳的差異をもたらすと考えるのか？ タイヒマンがこのことについて述べるには「この差異は [...] 十分明白だが、それがいつどのように適用されるのかは常に明白なわけではない。その上、この区別が何に基づくものなのかは明白ではない」(154-55)。なぜ結婚した人のセックスは、道徳の検問を通過するためには、身体的運動としても意図的行為としても本質的に生殖的でなければならないのか？ なぜ前者だけでは十分ではないのか？

ここでアンスコムはカトリックの自然法義務論を拠り所にする。自然法によれば、それに反することを選択してはならない諸々の基本的な善というものが存在する (Finnis, chap. 4, sect. 2 参照)。その一つは人間の生命である。結婚は人間の生命のために存在しているのであり、避妊してセックスすることは、人間の生命という基本的な善に反する選択をすることである。それは妊娠の可能性をあらかじめ排除してしまうことである。したがって、この行為は道徳法則を無視しており、実際それに公然と挑戦さえしている。

アンスコムは避妊に関する論文は彼女の同僚の哲学者には暖かくは受け入れられなかった。ピー

ター・ウィンチ (1926-1997) は、避妊したセックスと安全日のセックスには実際には論理的差異はないと主張し、アンスコム¹の 1972 年の論文を批判した。というのは、カップルが妊娠を避けるための「方法」(これが周期法(メソッド)と呼ばれているのは偶然によってではない)の一部として安全日のセックスをしたなら、そのカップルは妊娠しないことを意図しているからである。アンスコムは、実質的に、ウィンチは混乱していると反論した。彼女は行為に具体化された意図と彼女が「さらなる」意図と呼ぶものを区別を再確認した。彼女はこの区別を「争議行動」の例で説明した。労働者が自分の雇用者の目的を妨げる方法が二つある。一つ目は「順法闘争」によるものであり、それは自分の仕事はするが、厳密に自分の仕事だけしかしないことを意味する。二つ目は仕事をサボタージュすることである。これらの行為の意図——これらの行為のさらなる意図——は雇用者の目的を妨げることで一致しているが、行為それ自体は、意図的行為としては、異なるものと考えられる。一つ目の場合では、仕事をするを意図している(が、それしかしない)のに対して、二つ目の場合では、仕事をするを意図していない。

〔順法闘争とサボタージュの例と〕安全日のセックスと避妊したセックスのアナロジーは明白である。どちらの場合でも、カップルのさらなる意図は妊娠を避けることであるかもしれないが、安全日のセックスの場合だけが、いわば、仕事をしていることになる。安全日のセックスは身体的行為としても意図的行為としても本質的に生殖的な行為である。ピルを使った場合の避妊セックスが、仮に身体的行為としては本質的に生殖的であるとしても、意図的行為としては本質的に非生殖的である行為をおこなっていることになる。この区別はアンスコムが義務論者であることをはっきりと示している。なぜなら、帰結主義者は、どちらの行為もその帰結からのみ評価するから、それらは仮定により同じものである。帰結主義者は安全日のセックスと避妊したセックスに本質的に道徳的な差異はないと言う。アンスコムは本質的な差異があり、行為が具体化している意図に存するものだ²と信じる。回避することと防止することの区別は場当たりの (ad hoc) なものではない。それは他の多くの文脈でおなじみのことである。

当時、アンスコムのケンブリッジでの同僚であったバーナード・ウィリアムズ (1929-2003) とマイケル・タナーは彼女の 1972 年の論文を、ウィンチとは言葉は違うが、同じポイントを主張し批判した。「アンスコム教授はピルによる避妊法と周期避妊法の道徳的差異を一貫して擁護することには、彼女特有の議論の中でさえ、失敗している」(Winch et al., 158)。アンスコムはウィンチに対してそうしたように、実質的に、彼らは混乱していると言い反論した。彼らはアンスコムが苦勞して強調した行為に具体化されている意図と、それによって行為が行われるさらなる意図を混同していた(「妊娠と貞潔」145)。ウィリアムズとタナーは避妊は「無数の人々の福祉と尊厳に関わる重大な社会的道徳的問題」(Winch et al., 159)であるから、行為の種類を注意深く区別することによって解決することはできない、といった筋違いの(また、無意味 impertinent と言わざるをえない)主張をいくつもしたという。たとえば、避妊は、何百万という数の人々の福祉と尊厳にかかわる「きわめて重大な社会的・道徳的問題」であるので、といった理由をあげている、と。こうしたアンスコムの主張は、人間の行為(や他の話題)についての慎重な考えは人間の福祉と尊厳と矛盾し得ないと信じる多くの哲学者には衝撃を与えるものだったにちがいない。

また、ウィリアムズとタナーは同性愛者に対して無神経であるとアンスコムを厳しく批判した。

彼らは「異性愛関係における性的行為とまったく同じように、性的行為が愛の表現であるような……また同じように、関係する人々の生活において重要であるような同性愛関係など存在しないと信じているなら、彼女はまったくの無知である」(Winch et al., 160) と言った。だが、これらはアンスコム¹⁾の論文では論の行きがかり上述べられたことに過ぎない。これらは避妊に関する彼女の中心的な議論となんの関係もなく、それゆえ彼女の論文に対する批判としてもちだされるべきでもないだろう。最後に、ウィリアムズとタナーはアンスコムを「同性愛を自慰行為に比している」と批判する。だが、二つのことがらに共通するものがあると言うことは、すべてないしほとんどの点で同じだと言うこととは違う。アンスコム²⁾の見解では、我々が見てきたように、すべての婚外交渉は道徳的に許されない。「結婚なくして性的行為の余地はまったくない」(「子どもを作らずにセックスできる」³⁾ 91)。同性愛行為も自慰行為も、結婚してのセックスではない。アンスコム⁴⁾は婚外交渉が道徳的に許されないという命題について議論していない。彼女は単にそれを前提している。それは避妊についての彼女の議論の規範的バックグラウンドの一部である。彼女の夫、ピーター・ギーチの言葉を引用すると「セックスを贖ってくれる結婚の善を離れては、セックスは毒である」(147)。

参考文献

(OCR が不完全で壊れてます)

Anscombe, G.E.M. The Collected Philosophical Papers of G. E. M. Anscombe. Vol. 1: From Parmenides to Wittgenstein. Vol. 2: Metaphysics and the Philosophy of Mind. Vol. 3: Ethics, Religion and Politics. Oxford, U.K.: Blackwell, 1981; Anscombe, G.E.M. (1972) "Contraception and Chastity." Revised. In Michael D. Bayles, ed., Ethics and Population. Cambridge, Mass.: Schenkman, 1976, 134-53; Anscombe, G.E.M. Intention. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1957; Anscombe, G.E.M. An Introduction to Wittgenstein's Tractatus. London: Hutchinson University Library, 1959; Anscombe, G.E.M. "Modern Moral Philosophy." Philosophy 33 (January 1958), 1-19; Anscombe, G.E.M. (1957) "Mr. Truman's Degree." In The Collected Philosophical Papers of G. E. M. Anscombe. vol. 3. Oxford, U.K.: Blackwell, 1981, 62-71; Anscombe, G.E.M. "Practical Truth." Logos: A Journal of Catholic Thought and Culture 2:3 (1999), 68-76; Anscombe, G.E.M. (1968) "You Can Have Sex without Children: Christianity and the New Offer." In The Collected Philosophical Papers of G.E.M. Anscombe, vol. 3. Oxford, U.K.: Blackwell, 1981, 82-96; Dolan, John M. "G.E.M. Anscombe: Living the Truth." First Things: The Journal of Religion, Culture, and Public Life 113 (May 2001), 11-13. www.firstthings.com/issue/october2001/opinion/dolan.html [accessed 11 January 2005]; Finnis, John M. Natural Law and Natural Rights. Oxford, U.K.: Clarendon Press, 1980; Geach, Peter. The Virtues: The Stanton Lectures 1973-74. Cambridge: Cambridge University Press, 1977; Nagel, Thomas. "Sexual Perversion." Journal of Philosophy 66: 1 (1969), 5-17; Paul VI (Pope). "Humanae vitae." Acta Apostolicae Sedis 60:9 (1968), 481-503; Scruton, Roger. Sexual Desire: A Moral Philosophy of the Erotic. New York: Free Press, 1986; Teichman.

Jenny. "Intention and Sex." In Cora Diamond and Jenny Teichman. eds. *Intention and Intentionality: Essays in Honour of G. E. M. Anscombe*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1979, 147-61; Winch, Peter, Bernard Williams, Michael Tanner, and G.E.M. Anscombe. (1972) "Discussion of 'Contraception and Chastity.'" Revised. In Michael D. Bayles, ed., *Ethics and Population*. Cambridge, Mass.: Schenkman, 1976, 154-63; Wiugenstein, Ludwig. *Philosophical Investigations*. Trans. G.E.M. Anscombe. New York: Macmillan, 1953.